



文教研の葉

2012.夏
発行・編集
河合文化教育研究所

河合文化教育研究所《文教研》とはこんなところですよ。

設立と研究員

河合塾生のみなさんと、河合塾と河合文化教育研究所を繋ぐものとして、この「文教研の葉」を発行しました。

学術活動

同時に学術的な活動として、北京大学との共同学術討論会など多くの国際シンポジウムや、河合臨床哲学シンポジウム・公開講座・セミナーを数多く開催しています。日本の大学入試センター試験と中国と韓国の国の高校生・受験生に実際解いてもらう「中・日・韓の大学入試統一試験を社会的・文化的に分析する」という衛星放送を使ったシンポジウムは、当時話題になりました。その他にも「日本とドイツの若者は―いま」 「医学的人間学―西歐の主体と東洋の主体 「生命論」」などが実施されました。

出版

講師の先生が主宰するオリジナリテイのある26の研究会もあります。

出版活動として、シンポジウムをまとめものなどの単行本、研究成果を取めた研究論集、河合おんぼろず、数学シリーズ、河合ブックレットなどを出版しています。

たとえば、アフガニスタンで活動されている中村哲さんは（当時はパキスタンのベシヤワール）20数年前に河合塾で講演を行い、その記録がブックレットで出されました。また、南アメリカ大陸の最南端から人類発祥の地アフリカまで人力によるグレートジャーニーを行った関野吉晴さんは、10回近くも河合塾で講演をして下さって、ブックレットにもなっています。

また研究員が推薦する図書「わたしが選んだこの一冊」も編集してみなさんにお配りしています。

講演会

河合塾各地区でさまざまな文化講演会も行われています。まさに今、起こっている生の社会現象の根幹を考えるもの、医療の現状について、若者を取り巻く現場、国際機関で働いた経験談、コンサートやワークショップもあります。

塾生のみなさんが、ふだん当たり前に思っていることについて、問題が投げかけられ、異なる考え方や世界に触れることで、立ち止まって何かを考えるきっかけとなればと願っています。そこにはみなさんの席が用意されています。さまざまな事情で参加できない方のために、アーカイブ化も現在進められようとしています。

また、講演会では単に与えられたものをそのまま鵜呑みにするのではなく、疑問に思ったことを講演者に質問する質疑応答がとて刺激的な空間を作ります。知的好奇心をいだし、批判的な精神で講演者の語る世界に触れてみてください。

河合塾は単なる受験予備校でなく、ふだんの授業のプラスαとして、教職員が一体となって「場」を提供しています。河合文化教育研究所の活動をはじめとして、河合塾の様々な文化活動に注目して有意義な予備校生活を送ってください。



17 ファッションという装置
鷺田清一 解説 竹国友康 7500円

鷺田清一(わした・きよかず)先生は、1987年6月、河合塾大阪校で「ファッションという装置」を講演され、河合ブックレットになりました。

2012年 第12回 河合臨床哲学シンポジウムのご案内

臨床哲学とは何か

今年度の講演者は、哲学者の鷺田清一(大谷大学教授と、精神医学者の木村敏主任研究員です。臨床哲学について多くの発言があるお二人の講演は、今からたいへん注目され、話題になっています。

※お二人の評論は大学入試センター試験に出題されました。

- ・日程：2012年12月16日(日) 11時～18時
- ・場所：東京大学鉄門記念講堂
- ・講演者
(精神医学) 木村 敏 (河合文化教育研究所)
(哲学) 鷺田清一(大谷大)
- ・コメンテーター
(精神医学) 鈴木國文(名大) 兼本浩祐(愛知医科大)
(哲学) 野家啓一(東北大) 出口康夫(京大)
- ・司会：谷 徹(立命館大) 内海 健(東京藝大)

河合臨床哲学シンポジウム

木村敏主任研究員主宰の2000年から始まった、精神科医と哲学者が一堂に集まるシンポジウムです。



河合塾各地区での文化講演会

河合塾では、ふだんの授業にプラスαとしてさまざまな文化活動を行っています。みなさんが身近に直接参加できるものとして、講演会、コンサート、教養講座などがあります。

河合塾福岡校での講演会「福島原発事故―原発を今後どうすべきか」で生徒が質問に立っている場面です。



37 福島原発事故
小出裕章 解説 青木裕司 9000円

研究九室あちこち

事実の重さ

丹羽健夫



昨年3月11日、大地震とともに三陸海岸を大津波が襲った。明治以後、三陸海岸を大津波が襲ったのは今回が4度目である。吉村昭(1927-2006)という作家がいる。彼は何度も東北、なかでも三陸地方を尋ね歩き『三陸海岸大津波』という本を書いている。当時87歳で明治29年の大津波も経験した早野幸太郎という老人をはじめ、何人もの人を取材している。そして大地震、大津波の一月ほど前から未曾有の大漁があったことや、津波の来る直前に大砲の砲声のようなものが何度も聞かれた、などの前兆話を拾っている。

もちろん大津波のもたらした悲惨な被害も書いているのだが、それでも「三陸海岸を旅する度に、私は、海にむかって立つ異様なほどの厚さと長さをもつ鉄筋コンクリートの堤防に眼をみはる。……が、その姿は、一言にして言えば大袈裟すぎるという印象を受ける」と書いている。三陸海岸の大津波を、研究し尽くした吉村昭にしてさえ、このように言わしめているのだから、その堤防すら破壊した昨年の大津波が、いかに前代未聞のものであったかが分かる。

このように吉村は『三陸海岸大津波』を書くために現地に足を運び、においを嗅ぎ、人から話を聞き、資料を調べている。それゆえ彼の作品には事実の重さが満ちている。後年に入って事実の重さに惹かれるように、彼は記録文学に傾斜する。『零式戦闘機』もそのひとつだ。第二次大戦前半、戦闘機として必須な速力、上昇力、航続距離、旋回性能、いずれにおいても他国の戦闘機を寄せ付けぬ最強の戦闘機だ。

しかし吉村は本著では零戦の華麗な戦闘振りをもつばら追うのではない。零戦の設計にあたった人、場所、経過など事実を追い求めているのだ。すると意外なことが浮上してくる。

零戦は当初、三菱重工業名古屋航空機製作所で開発され製作されていた。そこは港の近くで飛行場はない。最寄の飛行場といえば岐阜県の各務原飛行場であった。完成した零戦を、そこまで運搬するのに牛車や馬車が使われた。

あらゆる近代技術の集約である零戦が、なんと平安朝の貴族よろしく牛車や馬車で、未舗装の凸凹道運ばれていくのだ。48キロの道を24時間かけて運ばれていくのだ。これこそ近代技術の粋と、時代遅れのインフラストラクチャー(社会資本)のアンパランスを、痛烈にあらわす冷徹な事実ではないか。重い事実ではないか。

さらに『戦艦武蔵』ではまたしても意外な事実を、吉村は繰り出してくる。武蔵は大和の姉妹艦だ。大和は呉の造船所で造られ、武蔵は長崎で造られた。艦の全長は263メートル、最大巾38・9メートル、46センチ口径の主砲9門を持つこの世界最大の機密兵器の巨艦を、世間の目からどう隠したらいいのか。

呉はもともと軍港なのでさして問題は無い。問題なのは長崎である。海軍はなんと棕櫚のカーテンで全艦を覆うことを発想した。そのためには膨大な量の棕櫚が要る。海軍は日本中の棕櫚という棕櫚を集めた。そして巨艦を覆った。

吉村は何度も長崎に足を運び、関係者や市民から話を聞き、ついに武蔵造船艦のペーペーを剥がす。そして書かれたのが『戦艦武蔵』である。

どうです。事実の重さが分かったでしょう。さあ君も事実の重さの探索に入ってください。たとえば数学という事実。数学は誰が作ったのか、数学を学んでどう人間が変わるのか。数学は将来役に立つのか。など。

主任研究員・特別研究員

このごろ思うこと

◎木村 敏 (精神病理学)

◎中川久定 (仏文学史・思想史)

◎丹羽健夫 (教育学)

◎谷川道雄 (東洋史)

◎長野 敬 (生物学)

◎渡辺京二 (日本近代思想史)

ウォーキングのことなど

木村 敏



ひとつづつ自慢できることはといえば、まだ臨床の仕事も続けていることです。週一回の外來診療だけでも、患者さんとの人間関係を維持し続けること、それが私の研究活動の最大の活力源ですから、これだけはなんとか継続したいと思っています。

プロフィール

木村 敏 (きむら・びん)

京都大学医学部卒。京都大学医学部専攻・精神医学、精神病理学。医学博士。京都大学名誉教授。ドイツ精神神経学会およびドイツ現存在分析学会特別会員。「あいだ」を軸にした独自の自己論で内外に大きな衝撃を与え、近年は環境に相即する主体を核とした生命論を展開中。1981年第3回シーボルト賞(ドイツ)、1985年第1回グーネール賞(スイス)、『木村敏著作集』第7巻が2002年度第15回和辻哲郎文化賞受賞、『精神医学から臨床哲学へ』(ミネルヴァ書房)が2010年度毎日出版文化賞受賞。2011年度第30回京都府文化賞特別功労賞を受賞。

昨年とうとう80歳台に入ってから、見かけも中身もすっかり老人になりました。歩く速度が非常に遅くなって、ひとと一緒に歩くとときに迷惑をかけるので困っています。それで、なんとか脚を鍛えなければならぬと思います。定年後に始めた毎日のウォーキングは欠かさず続けています。嵐山の自宅から2キロほどの松尾橋を渡ったところにある小さな喫茶店まで、書物とパソコンを入れたかなり重いリュックを背負って歩きます。その店で机ひとつを占領して2時間ほど仕事をし(大体は翻訳が多いですが論文も書きます)、また同じ道を歩いて帰ります。往復4キロ強でしょうか。歩くというのはほんとに気持ちのいいものですが、このところはそれもかなりきつくなってきました。なによりも転ばないように気をつけています。この年になって骨折すると大変ですから。仕事の方は相変わらず同じようなことばかりしています。論文を書いて講演をしても、いつも同じ話題ばかりで、まるで新味がありません。年寄りの話はいくつもの相場が決まっていますが、読み手や聞き手を退屈させないようには心がけています。今年7月に京都で国際的な西田哲学会が開かれることになり、その公開講演を頼まれて引き受けました。それと12月には東京で毎年恒例の「河合臨床哲学シンポジウム」が開かれるのですが、ここでも「臨床哲学とはなにか」という基本的な話をしなくてはならぬなりました。またしても二回にわたって同じような話をしなければならぬわけですが、どう味付けをすれば退屈させないですか、それが今年の最大の難問です。

研究のほうはそんなことですが、たった



木村 敏・野家啓一 監修 四六判 3900円

中国農民に夢を託す

谷川道雄



しい現象である。これまでの農民は官の不法を忍従するか、それが限度に達して暴動に走るか、二つの道しかなかった。しかし今や維権運動という、第三の道が開けてきたのである。それは中国農民がようやく近代的公民として成長してきたことを示すものではなからうか。

長年やってきた魏晉南北朝・隋唐史の研究をひと先ず棚上げにして、いま現代中国の勉強に熱中している。現代中国の動きは、歴史を目的のあたりに見るようにダイナミックで緊迫感がある。30年来の市場経済導入政策で、中国は急速な経済発展を遂げ、「世界の工場」と言われるまでに成長した。いまや経済大国、さらには軍事大国への道をまっしぐらに走っている。その反面、その成長がもたらした負の現象もただならぬものがある。官僚の腐敗・汚職を初めとして、国民間の所得格差の拡大、環境汚染、食品公害、思想・行動に対するきびしい統制等々数え上げればきりがない。民衆の政府・党に対する不満・憎悪は年を追って社会内部に沈殿蓄積し、頻々として反政府騒擾事件を生み出す。インターネットによる汚職官僚の摘発と攻撃も、すさまじいものがある。

中国には昔から「君は舟、民は水」のたとえがある。舟を載せて運ぶ水が一旦荒れ狂うと舟はひっくり返ってしまう。中国歴代の王朝革命の多くは、そこから起った。この言葉は現在の為政者たちもよく口にして戦々兢兢としているが、もはや後戻りできないようである。人口の半ばを越える農民も、貧困と地方官僚の不法な政策に苦しんでいる。私が注目するのは、その農民のなかに、法に保証された権利の侵害に抗議して、地方政府と対決して闘う集団が各地に生れていることである。彼らは維権農民権利を守る農民と言われているが、教育水準もさして高くない彼らが自ら法律を学習して、官と渡り合う姿は、従来の歴史には見られなかった新

しい現象である。これまでの農民は官の不法を忍従するか、それが限度に達して暴動に走るか、二つの道しかなかった。しかし今や維権運動という、第三の道が開けてきたのである。それは中国農民がようやく近代的公民として成長してきたことを示すものではなからうか。

プロフィール

谷川道雄 (たにがわ・みちお)

京都大学文学部史学科卒。専攻・中国中世(魏晉南北朝・隋唐)史。文学博士。京都大学名誉教授。北京大學・武漢大學客員教授。中国史を史的唯物論の定式によって理解しようとする戦後の中国史学の流れに反省と批判を加え共同体論的視点を導入して広汎な論争を引き起こすとともに、中国史学を活性化し新しい地平を拓く。

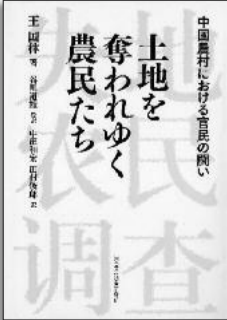
著書:『中国中世社会と共同体』『世界帝国の形成』『隋唐帝国形成史論』『中国中世の探求』他多数。このうち、前二著はそれぞれ北京と台北から中国語訳が出版され、また『共同体』の一部がアメリカ・カリフォルニア大学より英訳出版された。『隋唐帝国形成史論』は2004年秋上海から中国語訳が刊行された。河合文化教育研究所からも編著書『戦後日本の中国史論争』『中国史とは私たちに何があるか』(河合おんぼろ特別号)、『戦後日本から現代中国へ』(河合ブックレット)を刊行。現在も引き続き中国中世貴族の社会生活について研究を深めつつ、中国史を古代から現代までトータルに捉える方法の問題にも挑戦している。最近はいくく現代中国の農民の維権(権利擁護)運動に関心をもち、不法な政府の土地収用とそれに対する農民の抵抗を扱ったルポルタージュ作品『失地農民調査』(王國林著、2009年)を共同翻訳し、2010年文芸春秋より『土地を奪われゆく農民たち 中国農村における官民の闘い』という書名で出版。2011年には『中国現代農民維権活動覚書』(『研究論集』第8集)を発表。本年は『共同研究・現代中国農民の維権(権利擁護)運動―中国学界の討論をめぐって―』(中田和宏・田村俊郎両氏の共著、『研究論集』第9集)を発表した。

土地を奪われゆく農民たち

中国農村における官民の闘い

王國林 著 谷川道雄 監訳
中田和宏・田村俊郎 訳

四六判 4800円



中国の農村と農民を犠牲にして超大国へと脱皮した中国は、「共産党」と「市場経済」の結合が底なしの腐敗を生み出し、農民から土地と生きる糧を不法に奪っている。この現実を抗して立ち上がるという農民たち一人一人から聞き取った貴重な記録をもとに中国の農村問題の核心を明かす。

現代中国農民運動の意義

―前近代史からの考察―

中国農民の歴史的推移をたどりながら、現代維権運動の特質と必然性を明らかにする。

- ・日 時：2012年7月22日(日) 13時～18時
- ・会 場：龍谷大学大宮キャンパス清和館3Fホール
- ・講演者：谷川道雄(河合文化教育研究所)、高木智介(山口大)、馬彪(山口大)、葭森健介(徳島大)、小林義廣(東海大)、小野泰(河合文化教育研究所)、大谷敏夫(鹿児島大学名誉教授)、吉尾寛(高知大)
- ・司 会：谷口規矩雄(大阪大学名誉教授)、福原啓郎(京都外国語大)、河上洋(河合文化教育研究所)、柴田幹夫(新潟大)
- ・進 行：中田和宏(河合文化教育研究所)、田村俊郎(河合文化教育研究所)
- ・主 催：河合文化教育研究所
内藤湖南研究会・東アジアの歴史と現代研究会 共同企画

近況——28歳から81歳まで 中川久定

私はいつも、誰に対して書いているのだからか。自分自身に対して——自分のうちにある、自分が表現する言葉をじっと見つめ、その視線に耐えられないものは直ちに切り捨て、自らのうちに立ち現れてくる考えを、自分自身に対して書いているのである。

私が名古屋大学教養部から京都大学文学部に助教として移ってきたあと、『文学部研究紀要』に、1973年3月と1975年3月と、2度にわたって、フランス18世紀の著作家ドニ・ディドロ最晩年の、文学的遺書とも称すべき大著『セネカ論』についての論文を発表した。

ほどなくして私は、巻き紙に墨書された吉川幸次郎先生からのお手紙を頂戴した（かつてはフランス文学科の学生であり、吉川先生のご退官後しばらくしてから京大に勤めることになった私は、それ以前にも、当時も、中国文学講座の教授であった吉川先生とは、なんのつながりもなかった）。そこには、次のような趣旨のことがしたためられていた。——私は君の論文を読んだ。高度に専門的な事柄が、誰にでも分かる平明な言葉で書かれていた。本当の学者でありうるための第一の要件は、すべてを誰にでも分かる言葉によって書く、ということである。自分は確信している。君がいる限り、京大文学部は大丈夫である、と。この書簡に接した時、私は44歳であった。

それよりずっと以前にさかのぼる。大学院修士課程の学生であった私は、関西日仏学館で、館長グロボワ先生から週一回、午前中の

授業を受けていた。毎回書き取りがあり、厳しく採点されているうちに、最後に残った受講生は私ひとりになった。それから学期の終わるまでの1か月間、土曜、日曜を除き毎朝、私だけに3時間の演習が行われた。狭い教室で、辞書『リトレ・エ・ポーザン』だけを与えられ、課題論文を書かされるのである。その題を1つあげるとすれば、「事実 (fait) とは何か」であった。翌朝には答案が返されたが、いたるところに真っ赤な斜線が引かれていた。先生は一体どんな気持ちで、この誤りだらけの答案を読まれていたのだろうか。私はその後、東京日仏学院でフランス政府給費留学生選抜試験を受けようとしていた。その私のために、グロボワ先生が書いてくださった推薦文の中には、次の言葉があった。——中川は、「精神の独創的な形 (une forme d'esprit originale)」を備えている青年である。それ故、彼を「特に強く (tout particulièrement)」推薦する、と。私は28歳であった。あれから53年が飛び去って行った。

哲学者アランの弟子であったグロボワ先生のこの評価と、吉川先生のあの文章を、かつて私はそのまま信じていたし、今もそのとおりに信じている。この2つの言葉に、私は今も支えられながら、近くフランスで出版される第4冊目の著書に、毎日手を入れている。——L'esprit des Lumières en France et au Japon (『啓蒙の精神—フランスと日本』) 2013年、全2巻、計850ページ、パリ、Honoré Champion社。



●プロフィール

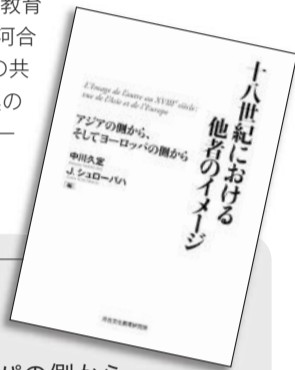
中川久定 (なかがわ ひさやす)

京都大学文学部仏文科卒。

専攻・フランス文学史・思想史。文学博士。京都大学名誉教授。日本学士院会員。元京都国立博物館館長。元国際高等研究所副所長。元国際18世紀学会副会長。国際18世紀研究センター学術委員(フランス、フェルネ＝ヴォルテール)。研究誌『ディドロ・百科全書研究』(フランス) 査読委員、研究誌『ディドロ研究』(カナダ) 評議委員会。

18世紀フランス文学・思想の実証的比較分析を行う。1976年辰野賞(日本フランス語フランス文学会)、1986年バルム・アカデミック勲章オフィシエ級(フランス)、1993年京都新聞文化賞、2001年勲2等瑞宝章、2004年レジオン・ドヌール勲章シュヴァリエ級(フランス)、2007年京都府文化賞特別功労賞受賞。

著書：『ディドロのセネカ論』『自伝の文学』『甦るルソー』『啓蒙の世紀の光のもとで』『転倒の島』『Des Lumières et du comparatisme』、『Introduction à la culture japonaise: Essais d'anthropologie réciproque』(フランス語原著に基づくスペイン語版、イタリア語版、ポルトガル語版あり)、『L'image de l'autre vue d'Asie et d'Europe』(éd. par H. Nakagawa et J. Schlobach)、『Mémoires d'un moraliste passable』。S・カルブ編中川久定/増田真監訳『十八世紀研究者の仕事 知的自伝』。河合文化教育研究所からも『ディドロの〈現代性〉』(河合ブックレット)、J・シュローバ氏との共同編著で18世紀国際シンポジウム論集の日本語訳『18世紀における他者のイメージ』を刊行。



十八世紀における他者のイメージ

アジアの側から、そしてヨーロッパの側から

中川久定 J.シュローバ 編

四六判 6800円

地球環境と人類の進化

長野 敬



進化の大原則の一つは、自然選択の結果として適当な者が残ることだ。ここで「適当」であることの基準は、概して個々の個体が、環境のもとでどれだけ具合よく生き続けられるかということと理解されてきた。これは必ずしも不都合でない理解だとしても、これだけでは、環境が静的で不動のものという感じが強すぎる。小鳥が小枝や葉を運んできて快適な巣をつくる時、小鳥は環境にはたらきかけてそれを変えている。だから環境も動的に変わるといふ視点が、もっと強調されるべきだろう。ただし先回りして、鳥の巣づくりも進化によって育つ

寺子屋に凝る

丹羽健夫

昭和6年に愛知県教育会は県下の全小学校に依頼を出した。「あなたの学校の周辺でむかし寺子屋に通った経験のある老人を探し出し、寺子屋の話の聞き。調査項目は以下の15項目」というものである。そのとき先生方が発掘した寺子屋数1、870件の記録が残っている。私はそれらの項目のうち謝儀、つまり授業料に重点をおいて調べてみた。金納つまりお金で授業料を払うケース、農産物など物納のケース、授業料など取らぬケースなどさまざまであるが、地域によってパターンが似ている。名古屋をはじめ尾張西部は金納が多く、東へ進んで三河地

てきた行動要素の組み合わせであると言ってしまうと、このように先手を打って解答が与えられたことから、問題は解消し、存在しなくなってしまう。個体(生物体)側に来て出張サービスする「還元論」によって、環境の動的性格がいまになってきたものではなにか。ことに人類の場合には環境を改変する能力の巨大さを、進化における要因の一つとして、もっと注目するべきだろう。

ところがそんなふうを考えていた矢先の一年前に、震災と津波が生じた。やはり最終的には、変えられない巨大な環境として地球そのもの(地殻の構造、プレートテクトニクス)があるのだ。また太陽は生命にとって、その大きさも地球からの距離も原初以来変えることのできない唯一の巨大原子炉であり、この初期条件を無視して人類が組み込んだ地球上でのエネルギー利用活動(「ついに太陽をとらえた」)が、その無理さを露呈したのが原発事故の姿だった。古い時代の人類にとって、地震とか津波は不機嫌な大ナマズあるいは海神の怒りの現れだった。現代がそのような擬人的な迷信や超自然の力に訴えることなく、たとえば地震の原因が大地を載せているプレートの相互間の滑りであることを突きとめ、滑りから生ずる波動をP波、S波などと分析して、実際の揺れに、ごく僅かにせよ先

区に入るにつれて物納が多くなり、三河山間部では何も取らなくなる。このことは貨幣経済、商品経済の浸透度に直結している。また興味深いことに物納地帯、何も取らない地帯になるほど、寺子屋師匠と寺子(生徒)や保護者の人的関係が深くなるように思える。

また国際的学力テストで成績が常に上位のフィンランドの教育とよく似た点がいくつもある。例えば上級生が下級生を教える。フィンランドではクニミと称しているが、人数が多い寺子屋でも同じことをやっている。共通点で決定的なのは、フィンランドの教師も寺子屋師匠も社会性を持っていることだ。くわしくはこの四月に上梓された「愛知の寺子屋」(風媒社刊)を読んでください。

●プロフィール

丹羽健夫 (にわ たけお)
名古屋大学経済学部卒。

立って、「緊急警報」を発することができ、科学知識の「勝利」のようにも見える。しかしこの解明も結局は、滑りが現実を生ずる可能性は「今後30年間に70パーセント」などと、確率でものを言うことしかできない。原発事故の原因である放射能についても、半減期が何年と、物理的に理解は精密に進んでも、人体が放射線にさらされても平気なように変わるわけではない。生物は——そして当然人間も——、最終的には大きな地球環境が与えている制約のもとで生き続けるほかにない。現代以後の人類進化の姿は、こうしたことも念頭に置いてイメージしてゆかねばならない。

●プロフィール

長野 敬 (ながの けい)

東京大学理学部植物学科卒。

専攻生物学。医学博士。自治医科大学名誉教授。細胞膜のイオン輸送要素の遺伝子構造を決定し、世界の遺伝子研究に先鞭をつける。細胞から生態系まで生物学をシステムの観点から統一的に見る独自の理論をとる。現在はこの理論の延長上で「生命研究を教育の中で多面的に正しく理解させる」ことをテーマに研究中。

著書：『生物学の旗手たち』『科学的方法とは何か』『変容する生物学』『進化論のらせん階段』『生体の調節』『生命の起源論』『生命現象と調節』『細胞のしくみ』『ウィルスのしくみ』と不思議、他に共著、翻訳書など多数。

名古屋外国語大学客員教授。

1967年より河合塾勤務。以来一貫してカリキュラム作成、生徒指導、教員確保、生徒募集に従事、進学教育本部長、理事として河合塾のみならず、日本の予備校教育の責任を担ってきた。現在は中等・高等教育問題等の出稿、高等学校・大学での講演等をごなし、教育の現場から制度まで教育全般について幅広くメッセージの発信を続ける。最近手がけている研究としては「寺子屋の授業料」「寺子屋・フィンランドの教育・そして日本の教育」がある。

著書：『予備校が教育を救う』『悪問だらけの大学入試』『眠られぬ受験生のために』『愛知の寺子屋』

『親子の大学入試』(共著)

『星の王子・王女たちの留学物語』(監修)



渡辺京二先生はこの一年間に三冊の本を新しく出版、八冊の本が復刊されました。それを新聞などメディアでは「渡辺京二ブーム」と報じていますが、なぜ渡辺先生のブームといわれるような風が起きているのでしょうか。

「ご本人はかつて『このところたて続けに昔の本が復刊されて、べつに注目されたとは思いません。むしろ、長生きすればこんなこともあるのかというありがたさは素直に湧いてくる』とお書きになっています。」

一年に一度、京都で開かれる河合文化教育研究所の主任研究員特別研究員会議に熊本からお見えになりますが、「石牟礼道子」さんの食事を留意するのでもおっしゃって、日帰りをされます。そんな渡辺先生の世界の一端に触れることができたなら、と特集しました。

わが誇大妄想

渡辺京二

去年は本を三冊出した。一冊は『女子学生、渡辺京二に会いに行く』という、面映

いタイトル。これは津田塾の三砂ちづる先生がご自分のゼミ生を熊本へ率いて来られるお寺で二日間話し合ったのが本になったもの。すべては三砂先生と、亜紀書房の足立恵美さんの計らいで進行したもので、私はただ例によってとりとめもなく喋り散らしただけであった。わざわざ熊本まで来られたので、一行を一夕馴染みのイタリアンレストランへご招待したのが楽しかった。

もう一冊は『未踏の野を過ぎて』と題して、ここ数年新聞・雑誌に書いたものや講演を集めて一冊にした。たまたま世相を論じたものをまとめた形になって、小言幸兵衛に化した気分、後味はよろしくない。

もうこんな文章は書かないと思つたことである。出版は福岡市の弦書房で、これで私の本を四冊も出して下さった。

さらにもう一冊は『細部にやどる夢―私と西洋文学』といって、副題にもある通り西洋文学について書いた文章をまとめた。私は文芸評論家でも大学の外国文学部の先生でもないから、ただ少年以来のヨーロッパ文学への愛を語つただけである。これも福岡市の石風社から出して下さった。社長の福本満治さんとはもう四十年を越す知り合いだが、本を出してもらうのはこれが初めて。また次の本を出して欲しいかな、などと虫の好いことを考えている。

以上に加えて、去年の暮れから今年初めにかけて、旧著が三冊復刊された。『私の世界文学案内(ちくま学芸文庫)』、『熊本県人(言視舎)』、『ドストエフスキイの政治思想』(洋泉社)である。いずれも、これまた

に矛盾である。自分はかくれていて、本だけ売られてくれれば、これが一番よろしい。といって生きていく以上、書きたいことはいくつもある。現にある月刊誌で六年も続けている連載にケリをつけねばならず、しかしそれにはあと三年はかかりそう。これは一種のギリシタン史で、和辻哲郎さんへの恩返しのもつもりで始めたら、とんでもない長丁場になってしまった。ほかにやっておきたい仕事がいっぱいある。私がそんなことをしないで、世の中にいささかの損失もないと承知してはいるが、自分の執念をなだめるためにもう少し本を書きたい。それにしてもいつまで仕事ができるつもりなのか。持つて生まれた誇大妄想は死ぬまで癒らないのだ。



四十年来にわたるつぎあいの小川哲生さんの肝入りである。小川さんは去年『わたしはこんな本を作ってきた』という著書を出された筋金入りの編集者だ。私は本を出すたびに、この世にゴミをふやしている気がしてならない。そんなら出すなと叱られそうだが、それは私の世渡りだから仕方がない。私は文を売るか、世渡りの術を知らぬのである。はた代、肺病あがりの身でどうやって世渡りすればいいのか途方に暮れて、自分の書いた文章が金になればよいのと溜息をついていたことがある。八十越して、文章でメシが喰えるようになったとは実に滑稽だ。しかし、本屋に行くのと本の洪水で、これはもう公害だわいと思う。その公害の一端を担っているのかと思うと尻が落ち着かない。私の本などこの洪水の中で目につきはしないのだが、たまに自分の名を見つけるとギョッと逃げ出したくなる。してみると自分の顔を売っている芸人諸君はさういふしんどい思いしているはずだ。それとも、あの人たちは神経の出来が違うのかな。私は世の片隅にかくれ棲んでいたい。文を書くのは生きていて呼吸するのとおなじで、自分のエゴのいとなみにすぎない。しかし、その文を売って暮している以上、商売はある程度繁昌してくれないと困る。実

●プロフィール
渡辺京二(わたなべ きょうじ)
日本近代思想史家。思想家。評論家。あり得べきも一つ一つの日本近代を背景にした独自の視角からの鋭い日本近代論、近代思想家論で著名。一貫して在野の研究者として生きる。幕末明治期の数多くの海外文献を精査して著した『逝きし世の面影』が、近代以前の日本のイメージを一新させたという事で多大な衝撃を世に与えたのは記憶に新しい。1999年度第12回和辻哲郎文化賞受賞。2010年、これまでで解明されてこなかった明治維新前後の北方史を、ロシアと先住民族アイヌ、日本の三者が持った異文化接触のエンジンを通して初めて活写した『黒船前夜―ロシア・アイヌ・日本の三國志』が刊行。大きな注目を集めた。2010年第37回大佛次郎賞を受賞。
河合塾福岡校で1981年より2006年までの25年間現代文科講師をつとめる。
著書『江戸という幻景』弦書房、『評伝宮崎滔天』(新版)書肆心水、『北一輝―ちくま学芸文庫』、『アーリーモダンの夢』弦書房、ほか多数。

この一年間に出版された11冊の著作

●新刊

- ◇女子学生、渡辺京二に会いに行く (亜紀書房) 津田塾大学三砂ちづるゼミとの共著 2011年9月 1,680円
- ◇未踏の野を過ぎて (弦書房) 2011年11月 2,100円
- ◇細部にやどる夢―私と西洋文学― (石風社) 2011年12月 1,575円

●復刊

- ◇維新の夢 小川哲生 編 (筑摩書房) 2011年6月 1,575円
- ◇民衆という幻像 小川哲生 編 (筑摩書房) 2011年7月 1,575円
- ◇なぜいま人類史か 2011年7月 945円
- ◇神風連とその時代 2011年7月 945円
- ◇日本近世の起源―戦国乱世から徳川の平和へ― 2011年7月 945円 (洋泉社)
- ◇私の世界文学案内―物語の隠れた小径へ― 2012年2月 1,260円 (筑摩書房)
- ◇熊本県人 言視舎版 (言視舎) 2012年2月 1,680円
- ◇ドストエフスキイの政治思想 (洋泉社) 2012年3月 1,029円

●話題になった2冊

『逝きし世の面影』

『黒船前夜』

渡辺先生の著書から紹介します。

『未踏の野を過ぎて』―無常こそわが友より
この地球上に人間が生きてきた、そしていまも生きているというのはどういうことなのか、この際思い出しておこう。火山は爆発するし、地震は起るし、台風は襲来するし、疫病ははやる。そもそも人間は地獄の釜の蓋の上で、ずっと踊って来たのだ。人類史は即災害史であって、無常は自分の隣人だと、ついこのあいだまで人びとは承知していた。だからこそ、生は生きるに値し、輝かしかった。

『未踏の野を過ぎて』―社会という幻想より
人は社会から認められ許されて生きるのではない。社会など知ったことか。社会に役立つとか貢献するとか知ったことか。まず自分が生きてみせる。そういうひとりひとりがいやおうなく関係を結んで、社会なるものが出現するのだ。

『未踏の野を過ぎて』未踏の野を過ぎて―前口上を一席より
およそ言論の場で、文章をおおやけにして身すぎ世すぎをしようとする者は、大にして天下国家、小にして身の世情にふれて、おのれの判断を誇ろうとする姿勢を免れることができない。誇ろうとはせぬまでも、自分がいかに智者であり賢者であるか、少なくとも人と違うことはいえる才人であるか、立証に励まぬわけにはいかない。
そういう賢者の構えがつづくいやになって久しい。しかしその自分自身が、文筆稼業が身につくにつれて、思想的な導師であるかのような姿勢にはまりこんで来たことに気づく。
(略)天下国家について考え、世相について思いを新たにするのは、私という少年の志であった。生涯の課題は死んでも捨てきれぬものではない。

『細部にやどる夢―私と西洋文学』あとがきより
旧制中学二年の秋、文学というしるものに開眼して以来、はたち代までの自分を育ててくれたのは、マルクス主義文献をべつにすれば、もっぱら西洋文学だった気がする。
(略)西洋文学とくに一九世紀のそれは自分の魂の原郷のように感じられた。
(略)フォークナーやカルペンティエールについて書いたり、また『案内世界の文学』と題する本を出したりしたのも、自分の発想の源がどこにあるか、ひそかに告白したようなものだと思つて思う。

『民衆という幻像』山河にかたどられた人間より
われわれの心は山河にかたどられているのである。自然は人間にとって資源である以前に、人間が人間として形成される場なのである。山や川や風や雨や、さらにはその中で生をいとなむ花や木や鳥やけものイメージなしには、人間にはいかなる思考も想像も不可能であつたらう。なぜか。その理屈はかんたんで、人間の意識は、宇宙船で飛来して宇宙空間から地上を観察しているような純粋理性ではなく、地球という実在系の一構成因として、系全体との関係=相互浸透のうちにあらしめられているからである。

問いを抱えて生きよ

この三月に、津田塾大学のゼミ生たち九人を連れて、八十歳の歴史家渡辺京二先生を熊本に訪ねた。層層は浄土真宗の寺に端座し、学生と先生を話題に二日間対話を続けた。子育ては福祉の対象か「学校は権力装置か」「福島の震災」と、豊穡に「彼女たち」の、精いっぱい自分と時代との対峙。その一区切りとしての卒論である。

「自己実現? それは世主義のことでしょう。人は生は無常埋没するのだからです。でもあなたがいよいよ卒論を書くとき、知の世界にひらかれた。その問いをずっと抱えていくことを。一生、本を読んでいきたいと思います。」

学生たちは涙ぐむ。

「この三月に、津田塾大学のゼミ生たち九人を連れて、八十歳の歴史家渡辺京二先生を熊本に訪ねた。層層は浄土真宗の寺に端座し、学生と先生を話題に二日間対話を続けた。子育ては福祉の対象か「学校は権力装置か」「福島の震災」と、豊穡に「彼女たち」の、精いっぱい自分と時代との対峙。その一区切りとしての卒論である。」

「自己実現? それは世主義のことでしょう。人は生は無常埋没するのだからです。でもあなたがいよいよ卒論を書くとき、知の世界にひらかれた。その問いをずっと抱えていくことを。一生、本を読んでいきたいと思います。」

学生たちは涙ぐむ。

女子学生、渡辺京二に会いに行く

亜紀書房 2011年